
鏡花水月～雪月花～

乃依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡花水月〜雪月花〜

【Nコード】

N9465K

【作者名】

乃依

【あらすじ】

人と接するのが苦手な憂。

一匹狼で有名な彼女にある日、夢で何度も見ていた不思議な容姿の青年が現実となって目の前に現れる。

アオと名乗った彼は「時間がない」と無理矢理彼女を不思議な世界に連れ出した。

昔の日本と中国を取り混ぜたような世界。

神が人に使え、妖が夜の町を歩く。

右も左も分からない世界で、
憂は東方蒼神師という役目に付けさせ
られる。

現夢、幻想の先に見るもの

鏡花水月

【現夢、幻想の先に見るもの】

闇はひたすらに深く、暗かった。

果てしなく遠くで流れる滝の音だけが低く響いている。

何も無い空間の中、不安にかられつつも彼女はそこから動くことはしない。

それはもうすぐ自分以外の者が来る事を知っているから。

もう少し、もう少し。

期待と不安のないまぜになった思いで、彼女はただ待っていた。その者を。

じっと目を凝らしていたはずなのに光はいつも気付かぬ間に現れる。ぼんやりと浮かんだ青白い光は、何もない闇の中で微かでも明るかった。

ひとつだけだった微かな光が、いくつも数を成して大きな光をつくる。

やがてその光が人の形を作り出して一層輝くと光から溶けだすようにその者は現れた。

かき上げられた青い髪は長く、数束の髪が黄金の瞳に掛かるように流れていた。

袴によく似た着物の裾を引き摺って数歩進み、彼女を眼に留めると意志の強そうな瞳が優しい物に変わった。

姿形は間違いなく人なのに、彼はどこことなく人間離れしていて独特な雰囲気をもっている。

莊嚴で、神々しい。

「 「

ふと彼の口が開く。しかしその声は滝の音に掻き消されたのか、距離が遠過ぎたのか、彼女の耳には届かない。
するりと長い裾から手が差し出され、青年は笑みを止めた。

「 「

こちらに來いと言ってるのだろうか。
さあ、とでも言いたげに差し出された手を彼女は躊躇いがちに見る。
彼は、何者なのだろう。
人ではないのは確かだ。青い髪は染めたとして、その目は生れ付きだとして、
ならば尖った耳は？口から覗く犬歯は？

わからない。

彼と似た“人でいてもう人ではないもの”を彼女は知っている。
しかし彼らもまた、こんな神々しい気をもっているのは一人もいなかった。

日常と非日常 現実と非現実

白い天井がぼんやりと見えはじめて、自分が夢から覚めたことを思い知らされた。

だるい身体を起こして時計を確認すれば、いつもと同じ早朝4時。

いつもこの夢から覚めたときは何だかがっかりした気分になる。

自分と彼以外誰もいない空間の方が、自分にとって現実なんかよりもひどく落ち着ける場所。

ここ数ヶ月、あの男の人は欠かさず自分の前に現れている。

ふつつならば怪しんだり、怖がったりするのが当たり前なのだろうけれど、私はそんな感情は一切なかった。

毎日見る夢なので慣れてしまった訳でもない。

ただ、酷く懐かしい気がして仕方ない。

懐かしいような、切ないような、苦しいような。

自分でもよくわからない気持ち。

夢は微かに、けれど確実に、少しずつ変化を見せている。

けれど結局いつも、彼が手を差し伸べて終わる。

自分はどうしてもその手を取りたいと思うのに、心の片隅で何かを拒む。

何故だろう。

何故懐かしいと思うのだろう。

何故不安に思うのだろう。

わからない。

それとも、夢自体が自分の心の現われだろうか。
つまらない日常から逃げ出したい願望。

「…あれは、ただの夢」

馬鹿らしい考えに自分で笑ってしまった。

自分は何も別に逃げ出してしまいたいほど今が苦しいわけでもない。
世の中に悩みを持たない人はいない。
その中で私はちっばけなひとつ。

まるで自分に言い聞かせるように、憂はもう一度呟いた。

「あれは夢、ただの夢。」

どれだけ不安に思おうが、懐かしく思おうが、夢は夢で終わってしまっから。

いつも夢をみた後は妙に身体がだるく感じる。

寝てるということは休んでいるということなのだから何故逆に疲れるのだろうか。

本当にこの頃、疑問のような違和感ばかり感じる。

ベッドからのろのろと抜け出して両手を天井に向けて大きく伸びをした。

ゆっくりと手を下ろしてもだるさはなんら変わらない。

というより、身体を動かすと更に疲れる気もする。

ふと白み始めた空に目をやると、太陽の縁が顔を出して光が差し込むところだった。

夏の終わりに差し掛かる、肌寒ささえ感じる朝。

黒い影が光から逃げるように、さあ、と引いていくのが分かった。

小さな頃から不思議な体験をするというのは何度もある。

確実に普通の人ならば体験しないような出来事だと言えるようなものも。

”人に見えないはずのものが見える”のもその中のひとつ。

一般的には幽霊と呼ばれる、死んでいるはずの人が見える現象。

だからあの夢も、この影もそれに類する物だと思っている。

けれど、どちらでも言える事で、あんな姿をした霊をみたことはない。

というより、霊ではない、といった方が正しいかもしれない。

ただひとつ確信を持ってわかるのは、この世の生き物ではないということ。

”生き物”とすら言えるのか怪しいということ。

齟齬から生まれる拒絶

毎日の登校中、下校中、または休日友達と遊びに行く時、外へ出かけるとき、“彼ら”は嫌でも目に入る。

例えば今、学校の校門までの、ほんの数メートルの坂道にでも、息を潜めてこちらを見ている、“彼ら”。

見えないふりして、平静を装って、歩く足を速めた。

人は見えないものに畏怖の念を感じる。

それは神様だったりその使いだったり、あるいはその正反対のものだったり。

正反対でも、それらは本質的には変わらないのかもしれない。

現実世界なんかよりも精神世界に近い場所にいるのだから。

私は見えていてもそれが怖くて仕方ない。

見てみぬ振りして通り過ぎれば良い。それでも”彼ら”は分かっている。

私に彼らが見えているということ。

夜に蠢いている黒いカゲ。

光の少ない夜では動きが活発なだけ。別に昼に街に出ても到る所に蠢いている。

ただ潜んでいるだけ。活動していないだけ。

物陰からいつも人をうかがっている。見えないけれど、わかる。

他の人に彼らが見えていないのも知ってる。

彼ら　、いわゆる霊と呼ばれる者達。

死んだ人の意思の念が形になったり、誰かへの恨み妬みだったり。あるいは、もっと別の。

ただ、私が彼らを怖いと思うのは彼らに畏怖の念を感じるからじゃ

ない。

普通の人に見えないとはいえ、この世に死んでからも尚形を留めるほどの強い意志。

それほど何を憎んでいるんだろう。哀しいのだろう。淋しいのだろう。苦しいのだろう。

きっと向こうに行けば孤独じゃないのに、どうしてもそこで淋しく佇んでいるんだろう。

きっと彼らに恐怖を感じるといっているのは間違っている。

彼らにここまでさせるに至った人生。

そうしなければいけない彼らの空しさ。

そしてそうしなければいけない状況を作ったこの世界。

私はきつとこの世界が、否、人が、怖くて仕方ない。

「あ、立花さんおはよー」

「おはよー」

朝のたるさが抜けないまま、学校へ行くとクラスメイトが挨拶をしてくれた。

それに同じように挨拶をかえして自分の席へと座る。

窓際の後ろの方の席は日が当たって比較的居心地がいい場所だ。

「おはよう憂ちゃん」

「あ、恵香ちゃんおはよう」

ふいに背を叩かれるのと聞き慣れた声に振り返ると、クラスの中でも特に仲良くしている友達だった。

去年同じクラスになって知り合った子で、他愛ない話をしていたらいつの間にかクラスで一番仲のいい子になっていた。

色々相談に乗ってくれるしっかり者の子で、何処から見ても優等生という感じだ。

「顔色悪いけど…また何か見たの？」

挨拶の大きな声とは裏腹に、内緒話のように声を小さくする彼女。渋々頷くと、あからさまな一瞬嫌な顔で私の顔を見た。すぐその後いつもの笑顔に戻ったけれど。

「またあ？やだーこの教室にいたりしないよね？」

「う、うん大丈夫」

以前悩みはあるかと聞かれて、信頼し切っていた私は彼女なら大丈夫かと、死んだ人間が見えると零してしまった。

冗談だと思われているらしく、こういつて最後には笑い話にされてしまう。

その前に必ず嫌な顔をするのを知っている。

私にとつても、彼女にとつても、言わなければよかったと後悔した。良く考えれば分かることだ。

見えない人に、それを説明するのは酷く難しい。

人が見えないものが見える。人と違う何かがある。

そのことに人はこれ以上ないほど嫌悪する。

身に染みてわかっていたのにそれでも聞いてほしくて言ってしまった。

それ以来誰にも話していないし、自分からはその話をしていない。仲のいい友達でさえ、私のこの能力を否定する。

他の人になんて、怖くて言えるはずも無い。

ふと始業を知らせるチャイムが鳴って担任の先生が入ってくる。

クラス委員の起立の号令とともに、背後から溜め息が聞こえてきた。別に彼女は私を嫌っているわけじゃないと分かっているけど、私の中の何かを否定されるといふのは辛いものがある。

仲の良い彼女ならば、尚いっそう辛い。

どうしようもないことは分かっている。

ただどうしようもできないという事実が、もどかしい。

だって私の全てを理解してくれとどんなに叫んだとしても、それを知ろうとしてくれるとは限られないのだから。

その後の休み時間のおしゃべりもなんだか居心地の悪いものになってしまった。

見えないはずのもの

学校を終えた帰り道、ふいに暗い気配を感じて全身に鳥肌が立った。人の気配とは明らかに違う気。

叫び、嘆き、悲しみ、怒り、憎しみ

そういう負の感情を混ぜ合わせたような独特な色をしているそれはごく近くにあった。

どくりと心臓が高鳴りだす。

『 …… 』

ふいに全身が警笛を鳴らしたので走り出した。

いつもの日課になってしまった、近所の神社に駆け込む行為。

神社などの神聖な場所にはその土地の氏神や地祇が施した結界がある。

鳥居さえくぐればそれが邪悪な感情を寄せ付けずに守ってくれる。

「っはあ…っは、」

たった数分走っただけなのに息が上がった。

何度か呼吸をして息を整えてから、肩からずり落ちた鞆を持ち直す。

『 なんだおぬし、みえるくせに”アレ”がこわいのか？ 』

ふいに聞こえた声に振り返ると罰当たりにも、ここの守り神を象つた狐の像の上に座る猫がいた。普通の猫の一回りも二回りも大きな猫だ。全体的に灰色で、黒い斑模様が入っている。ひらりと揺れた尻尾を見れば、尾が二つに分かれていた。

『あすはもちづきだからの。きをつけねばおまえのようになんげんはとりころされるぞ』

呆然とその姿を見て、思わずその尻尾を確認しようと掴むと、猫からぎゃあと悲鳴が上がった。

「……………化け猫…？」

『ぶれいものが！あんなていぞくなやからといっしょにするな！』

「ついた…っ！」

怒鳴り声と同時に手を爪で引つ搔かれた。

深くはないけど地味に痛くて、傷口を手で押さえた。

見かけによらずフットワークが軽い猫だなあと思っていると猫はどこぞの時代劇のように「ずがたかい」と威張った。

…貴方の態度の方が高いです。

「えーとじゃあどちら様ですか？」

『われはねこまたともうす。これでもおまえのなんばいもいきておるのだぞ』

「はあ…猫又…？」

『めうえのものにはさまをつけよ。おぼえておけこむすめが』

というか、猫又と化け猫の違いってなんなんだろう。

うやまえあがめろ、と二本足で立って人間のようにふんぞり返る猫はなんともかわいらしい。

昔から噂話などで聞いたことはあったが見るのははじめてだった。

人語を解し、人語を話す数十年、数百年以上生きて尻尾がふたつに分かれた猫。

「えーと猫又様？」

『なんだ』

「とりあえず天弧さんに叱られますよ」

像の上なんかに乗ってるぞ。

途端に猫又様は宙に跳び上がった。(ついでにそのまま落ちた)

『はやくゆわぬか！だからおぬしはこむすめなんじゃ！』

ここの守り神でもあり、この神社の主でもある狐の神様。

奥の社に行けば大抵会うことができるが、時折神社内の森をふらふらしていることもある。

と思えばお供え物の油揚げをががつ幸せそうに食べているときも

ある。(それがすごくかわいい)
小さい頃霊や妖怪に付き纏われて泣く私を気まぐれに助けてくれた
ことがきっかけで、私はいつもこの神社にお世話になっている。
この辺一帯の土地で一番偉い神様。
能力があつてよかつたと思うのは、彼らのような妖怪や物の怪の類
と喋れたり仲良くなれたりすることだ。
…時折人間を喰らおうとするのもいるけれど。

「それって責任転嫁なんじゃ…」

『おや、おぬしふしぎなめをしておるの』

「(話逸らした…)今更気付いたの猫又様」

『われはめがわるいんじゃ』

「猫なのに」

正直言うとあんまり目のことは言ってほしくない。

私が小さいころにいなくなった両親が、外人だと言うことは親戚か
ら聞いたことがない。

それなのに私の目は青い。

母の實の妹である叔母が純日本人なので母は日本人で間違いないは
ず。

もし、父が外人で青い目をしていても、それはありえない話なのだ。
茶色の目を持つ人が青色の目を持つ個体と交配してもブルーの目の
子供が生まれることはまず無い。

医学的に、遺伝的に、まずありえない話。

『すいみゃくのきがつよいようじゃな』

「水脈?気?」

『みずのつき、みずのひ、みずのときに生まれたものがなりやすい』
「水の月？梅雨の6月とか？」

聞きなれない単語に理解がついていかず聞き返すが、猫又様は忙しなく辺りを見回して慌しく踵を返した。
水だとか日時だとか目の色とどう関係があるというのだろう。

『それじゃあわれはいくからの。』

「行くつて…せめて意味を」

『またあえるたらよいなこむすめ』

絶対そう思っていないであろう態度でそう言うと猫又様は逃げるように去っていった。

よりもよってこの町で一番の神様に罰当たりなどと畏れ多いをしてしまったので気付かれる前に帰ってしまおうという腹なのだろうか。

…とにかく変な猫だった。

ふと空を見上げれば、満月に程近い白月がある。

月の満ち欠けや引力は人に密接に関係しているというが、月は全てのものに等しく平等だ。

あれほど輝いているにもかかわらず、常人には見えないものがざわめきだす。

この能力も例外じゃない。

月が満ちていくほど感覚は鋭くなり、月が欠けていくほど弱まる。

きをつけねばおまえのようなにんげんはとりころされるぞ

ふと猫又様の言葉を思い出して、外に何もいない事を確認してから
早足で帰路に着いた。

胸に落ちる寂しさ

「……………ふう」

自宅のマンションに辿り着いて、肩に重く押し掛かっていた鞆を床に下ろした。

1人暮らしなので当たり前だが部屋は暗く、冷え切った空気が淀んでいた。

手探りで電気のスイッチを探り点けて、鞆を引き摺ってソファまで行き、思い切り倒れ込んだ。

私には毎日ご飯を作ってくれる母親もいなければ、夜遅く帰ってきて叱ってくれる父もない。

以前まで親戚の叔母さんにお世話になっていたが、1人立ちしたくて両親が残っていたこのマンションへ引っ越した。

親戚の話によれば両親は岸に飛び込んで死んだという人もいれば、私を置いてどこか遠くの地へ行ったという人もいる。

確かに言えるのは、今現在何処にいるのかも生きているのかも分からないということだ。

私がつんと小さい頃にいなくなったので顔さえ覚えていない。

「ん~~~~っ」

横になつたら眠気が襲ってきて、欠伸と一緒に伸びをした。

こういう時、お母さんがいれば言いたいと思う。

ただ単にご飯を作るのが面倒くさいだけだけれど。

両親が生きていて会えるのならば、聞きたいことがいくつもあった。目のこと。靈感のこと。私を置いていってしまったこと。その理由。私の知っている親戚の中で、私と同じように靈感を持った人はいなかった。

靈感は遺伝するのだという。

ならば、両親のどちらかが、同じように靈感を持っているのだろうか。

同じように、悩んでいたんだろうか、それとも私とは違って気にも留めていないのだろうか。

テレビなどで霊能力者という人はいるけれど、血が繋がっていると、両親の方がずっと身近な存在の気がした。

両親がいたなら、何でも話せる気がしてならない。

それともそうであってほしいという願望なのかもしれないけれど。

人ごみの中にいるときの方が、私は独りだと感じてしまうときがある。

学校の教室で授業を受けている時、人が大勢集まっている時、ふと思っ。

この中で私と同じ人間はいるのだろうか。

同じように悩んでいる人はいるのだろうか。

悩みを持っていない人はいないというのだから、辛いのはひとりだけじゃないというのだから、まったく同じ悩みを同じ数だけ持っている人がいるんじゃないんだろうか。

そう思っ、1人だと気付く。

学校が嫌いなわけでも、人間関係がうまくいっていないわけでも、人が嫌いなわけでもない。

それでもふと、突然何かの拍子に人との隔たりを感じてしまう。

私に靈感があるということが、私が青い目をしているとか。両親がいないということが。

人が持っているはずのないものを持ってて、人が持っていないものを持ってて。

そういうものが関係しているのかもしれないし、関係していないのかもしれない。

何かが違う。そう強く思う。私が違う世界の人間だったと言われれば納得してしまうような。そんな感じ

。例えばパズルのピース、形は周り合ったのに絵柄が明らかに違う時みたいなの。

そしてそれは結局間違いであって合っているわけじゃない。

そのピース1つで、出来上がった絵はちぐはぐなものになってしまっただけから。

たった1つが全てを壊してしまうような。

そんな日が来るような気がして、私は私が怖くなる。

まどろみに囚われて、私はご飯を食べるのもお風呂に入るのも忘れて寝入ってしまった。

それは恋着にも似た、

滝の音。暗闇。光。やさしさ。いとしさ。せつなさ。なつかしさ。

嗚呼、あの夢だ。

それだけで分かってしまう程、毎夜見る夢。

酷くこがれる夢なのに、私はその男の人に躊躇いや戸惑いに似た何かを思う。

気高い金色の瞳。なのに優しい色を灯す瞳。

角はないけれど、昔絵本で読んだ心優しい赤鬼と青鬼の話思い出した。

人とは違う風貌だからこそ、怖い印象はもたない。

妖や物の怪ならば、私は大した恐怖心を持たないですむ。

彼らはただ同じ場所で生きていただけであって、人に害を及ぼす者の方が圧倒的に少ないからだ。

ふいに笑みが止んで、差し出されたてのひら。

彼の唇が動いたと同時に風が吹いて、一瞬遅れてそれは私の耳に届いた。

『来い、　　憂』

ざわりと、全身を駆け巡ったその感情が込み上げてくるのが分かった。

私はこの人を知っている。

記憶なんかじゃなくて、思い出なんかじゃなくて、もっと潜在的で
もっと心の奥深く。

魂自身が感覚として記憶してる。知っている。

『憂』

「……………名前」

どうして、私の名前を知っているの。なんて大切そうにその名を紡
ぐの。

ふわりとあたたかく笑うやさしさに、なぜか酷く切なくなって、泣
きたくなった。

恋人の名でも呼んでいるように、あんまり穏やかな声音だから、私
はまるで本当にそうであるかのような感覚に陥ってしまう。

そちらに行こうと足を進めようとして、やっと自分の足が動かない
ことに気付く。

なぜだろうと足元を見れば、彼の光によって肥大した影が蠢いてい
た。

生温い、どろりとした感触が足に絡み付いて、全身に悪寒が走った。

「っや…！」

振りほどこうとしても、逃れようとしても、それは無遠慮に侵食し
てくる。

膝までだったそれが腿にまで這い入って来て、気色の悪さに身体が
震えた。

ふと助けを求めるように伸ばした手が、何かあたたかいものに包まれた。

あんなに遠いと思っていた手が届いていた。
瞬間に見えたのは、青白い閃光。

影が苦しげな奇声を上げて退いた。
途端に手首を掴まれてものすごい力で引っ張り込まれる。
思わず目の前の身体に手を付くと、ふわりと焚き染めた香の匂いがした。

『あれは夢に憑く妖だ。取り込まれたら甘い夢を見せられ続けて二度と目覚めない』

夢に取り憑いて甘い夢を見せる。
それはあなたもじゃないんでしょうかと思っていたらどつやら口に出ってしまったらしい。
ふと青年はムスリと不機嫌な顔になった。

『あんなのと一緒にするな』

「あ…う、ごめんなさい」

整った顔で凄まれると怖いものがある。異形の者なら尚更だ。
おっかなびつくり謝ったら青年は表情を変えてさも楽しげに満足げに微笑んだ。

『そんなに固くなるな。別にとって食いはしない』

ていうか、顔が近いんですが…。

腰にまわされている両腕の所為で私と彼の距離は無いに等しい。頬が熱くなるのを感じてうつむくと、更に顔を覗き込まれるので困った。

本人は何にも気にしていない様子なので更に困った。

「…ええと、」

離してほしいという意思表示のために両腕を突っぱねてみるが、その身体は微動だにしないどころか、更にくっついてくる。

まったく悪気が無い所か、あまりに楽しそうというか幸せそうというか満足そうにしているので邪険にも出来ない。

それどころかさも当たり前のようにその動作をするので、恥ずかしくて照れている私のほうがおかしいのかとさえ思ってしまう。

困った。

どうすればいいのか分からず固まっていると、またくすくすと笑う声が聞こえた。

『流石に夢じゃ無理だな』

「はあ…」

言葉の意味が掴めず、曖昧な受け答えになってしまふ。
何故私の夢に出てくるのかとか、さっきの来いつていうのはどうい
う意味なんだとか、何故名前を知ってるのかとか、あなたは一体何
者なんだとか、何故私を呼んでいたのかとか、聞きたい事は山ほど
あったのに言葉は何一つ出てこなかった。
どうやら予想だにしなかった展開に頭が混乱しているらしい。

『…そろそろ時間だな』

「え…？」

ぼつりと呟かれたそれに視線を上げると、私を見下ろして先程と寸
分も変わらず微笑む青年の姿。

鋭い爪を持った手なのに、酷くやさしい手つきで頬を撫でられてい
ると、ふいに額にふわりとやわらかなものが触れた。

『また会おう憂。次は起きてる時にな』

状況についていけず呆然とする私の視界は、まだたきした瞬間、既
に自室の天井を映していた。
ほんの数分で自分の身体に染み付いた香の匂いを思い出して、思わ
ず布団に突っ伏して呻いた。

「……………欲求不満なのかな、私」

とりあえず火照った顔をどうにかしようと、洗面所へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9465k/>

鏡花水月～雪月花～

2011年10月6日17時14分発行